

名前： \_\_\_\_\_ 学籍番号： \_\_\_\_\_ ⑩

alias (エイリアス) とは日本語で \_\_\_\_\_ の意味である。

ls -lh を lh と打てば実行できるようにするには \_\_\_\_\_ と alias を設定する。すでに登録されたエイリアスのリストを表示するには \_\_\_\_\_ とする。

コマンド foo がどのような種類のコマンドであるかを知るには \_\_\_\_\_ とする。上記コマンドでわかるコマンドの種類は 1 \_\_\_\_\_ 2 \_\_\_\_\_ 3 の3種類である。

エイリアスの場合、上記コマンドに \_\_\_\_\_ オプションをつけることで、パスも表示される。

上記の3種類のコマンドの優先順位としては以下のようになる

\_\_\_\_\_ > \_\_\_\_\_ > \_\_\_\_\_

3種類のうち、組み込みコマンドとは \_\_\_\_\_ に組み込まれているものでコマンド自身の実体はない。一方、外部コマンドはコマンドの実体がファイルとして存在し、これらのコマンドファイルは通常 \_\_\_\_\_、 \_\_\_\_\_、 \_\_\_\_\_ などのディレクトリにある。

greet という名前のシェル変数の値を Hello という文字列で設定したい場合、以下の様にする \_\_\_\_\_

これにより echo \_\_\_\_\_ とすれば、Hello という文字列が表示される

定義されているシェル変数のリストは \_\_\_\_\_ というコマンドで見ることができる。

環境変数とシェル変数の包含関係としては、 \_\_\_\_\_ が \_\_\_\_\_ の一部である。

環境変数とシェル変数の違いとしては、 \_\_\_\_\_ は子プロセスに引き継がれるが、 \_\_\_\_\_ は子プロセスに引き継がれない。上記でシェル変数とした greet を環境変数とするためには \_\_\_\_\_ とする。

bash が動いているターミナルで、bash とすると、もともと動いていた bash を \_\_\_\_\_ プロセスとして、新しい \_\_\_\_\_ プロセスの bash が動く。ここで新しく起動した bash を停止するには、 \_\_\_\_\_ あるいは \_\_\_\_\_ とする。

シェル上で使用する言語を選ぶ場合には \_\_\_\_\_ という環境変数を設定する

外部コマンドの置かれている場所と優先順位は \_\_\_\_\_ という環境変数に記述されている。この環境変数の値は \_\_\_\_\_ 記号で区切られたコマンドを格納するディレクトリのリストになっている。シェルはこのリストにあるディレクトリを順番に探索し、最初に一致するファイル名のあるディレクトリのコマンド実行形式ファイルを実行する。

alias や環境変数の設定は Ubuntu を再起動すると元に戻ってしまうので、起動するたびに設定したい項目は、ホームディレクトリにあるファイル名が \_\_\_\_\_ で始まる隠しファイルの一つ、 \_\_\_\_\_ に記述しておくが良い。

ホームディレクトリに作成した bin というディレクトリを、外部コマンドの置き場所の一つとして登録するには、上記のファイルに \_\_\_\_\_ という 1 行を加えておく。